

〔講演〕 pp. 29-37

手の倫理、“ふれる”と“さわる”

伊藤 亜紗

(東京工業大学)

障害から身体を考える

みなさんがタッチ(touch)を介してケアをされているときには“ふれる”ことにまつわる問題が多く生じると思われるが、私は実践者ではないので、ここでは、“ふれる”以外のタッチの側面の検討を通して、“ふれる”ことを考えていきたい。

私の専門は美学で、障害の研究をしている。障害というと、社会福祉の分野の研究者が多いが、私は障害を持った方々のサポートをしているわけではなく、単純に身体に興味をもち、障害から身体を考えることをしている。美学とは、言葉を使って言葉にしにくいものを研究する学問分野で、哲学の親戚にあたる。

私自身は、子どもの頃から吃音をもっており、しゃべることが難しかった。今も少しはどもるが、子どもの頃はもっとワイルドにどもっていた。これまで、言葉と自分の身体との間には、ずっと距離があり、その距離を調整し続けるのが私の人生であったな、と感じる。また、そうした調整の延長で研究をしている、という自覚がある。吃音をもっていなくても、元々、「言葉」と「身体」とは相性が良くないが、この2つをぶつけていくことで、「言葉」も更新されていくし、「身体」も更新されていく。この2つの出会いを研究対象にしている。「障害を持った身体は、どのような可能性をもっているのか」「その身体から世界はどのように見えるのか」「その身体をどのように使っているのか」といったことを、インタビュー調査により明らかにしようとしている。

日本語の“ふれる”と“さわる”

英語で‘touch’と表現される接触は、日本語では“ふれる”と“さわる”という2つの動詞で表現され、両者のニュアンスは異なっている。この違いが最もわかりやすいのが「傷口にさわる／傷口にふれる」という2つの言い回しの対比ではないかと思う。「傷口にさわる」という際には、「ちょっと手を引っ込めたくない」「痛そうだな感じがする」、概して、一方的、すなわち、接触しようとする人が、自分の計画通りに、自分が接触したいように接触する、というニュアンスを含んでいる。これに対し、「傷口にふれる」という場合には、接触しようとする人が「このように接触したら相手は緊張するかな、痛いなかな」などと、接触される側の人の状態や感情などを考えた上で接触の仕方を調整するといった、相互的・双方向的な契機が含まれている。“さわる”は物体に対する接触であり、“ふれる”は人間的な接触といえるかもしれない。

さわる

傷口にさわる△
さわって確かめる○
怖くてさわれない○
医者が患者の腹部にさわる○
外気にさわる×

ふれる

傷口にふれる○
ふれて確かめる△
怖くてふれられない△
医者が患者の腹部にふれる△
外気にふれる○

一方的／ものの 相互的／人間的

ただ、現実にはこの区別はそれほど単純ではない。例えば、病院でお医者さんが患者さんの身体に接触する

場面では、“さわる”という表現を多く用いる。逆に、お医者さんが患者さんの身体に“ふれる”と表現すると、「湿度が高い」感じがしたり、あるいは患者さんに「この場で、そのような感情的な交流は要求していないのに…」という気持ちの悪さが生じてしまったりする。むしろ、患者さんとしてはお医者さんに身体を“さわって”ほしいと感じるのではないかな。つまり、私たちが病院で経験し求める接触は、非対称的な接触なのである。患者さんは、専門的・科学的な知識を有するお医者さんによって、サイエンスの対象として接触される、といえるだろう。また、このような構造になっているからこそ、病院では“ふれる”という表現よりも“さわる”という表現のほうがしっくりとくるのだと思う。

さらに細かく見ると、西洋医学の領域では科学的な“さわる”という表現になるが、東洋医学での身体への接触の様相はまた少し異なってくる。西洋医学では「触診（しょくしん）」という術語が使われるのに対し、東洋医学では「切診（せつしん）」という術語が用いられている。西洋医学では、身体をパーツに分け、区分された臓器の状態を観察する目的で触診をするので、接触する側による一方的な接触になる。これに対し、東洋医学では、患者さんの全体的な状態を診るために接触がなされる。典型的には、例えば、接触到際し、患者さんがくすぐったがる場合、西洋医学では、これを臓器の状態をわかりにくくするノイズととらえ、こうした反応は無くなってほしいと医者は考える。対して東洋医学の切診では、くすぐったがることも患者さんのホーリスティックな反応のなかの1つとしてとらえ、「この患者さんの緊張度・反応度は高いな」といった医療的情報として利用していくため、こうした反応を無くなってほしいものとは考えない。その意味で、東洋医学の切診は“ふれる”に近い。

このように見ていくと、前提となる人間観、身体観があり、それに応じて、当該の接触が“ふれる”“さわる”と表現され分けているのだと考えられる。

視覚障害者の伴走：信頼の奥行

私が「接触」という問題に関心をもったきっかけは、視覚障害者の方々の伴走をした経験だった。全盲あるいは弱視の方が長距離を走る際には、必ず晴眼の伴走者がつく。その際、ロープを輪っか状にし、両者がその両端を握り、手の振りをシンクロさせながら長時間、走っていく。

使われるのはただのロープであるが、ものすごく多くの情報量をもっている。例えば、走っていて前方に坂が迫ってくると、ロープを介してそのことが視覚障害者にも分かるのである。これは、伴奏者が、坂が見えることで、それに備え幾分、身体を緊張させるため、その体のこわばりがロープを通じて視覚障害者にも伝わっていく、ということだ。また、ここで重要なのは、「伝える」というのではなく「伝わる」ということである。ロープが情報量を豊富にもつというのは、伴奏者が伝えようと意図したり、言語化されたりする以前の情報がロープを介して共有される、ということを意味している。ロープを通して、視覚障害者にも「坂が見える」「走路が見える」ということが生じているのである。



（ロープにはあそびが必要）

伴走の経験を通して触覚から得られる情報量の多さには驚いたが、それよりも私に衝撃を与えたのは、私自身が目隠しをした上で、晴眼者に伴走してもらう経験であった。これは、それまで全く味わったことのない経験であった。視覚を遮断し、前に進む、さらには走るということが、最初はとても怖かった。しかし、途中で怖さを手放し「伴走者を信じよう」と心に決めた途端、大きな快感を味わうことになった。この快感とは「ここまで人を信頼していいんだな」という快感と言い換えても良い。自分は、健常者として社会のなかに生きており、同僚や家族を信頼しているつもりでいたが、信頼には自分が思っていたよりもずっと深い奥行きがあった、という発見がもたらされた。大袈裟に言えば、自分の生命すらも相手に預けて走る経験をし、ここまでも自分のことを人に委ねることができるのだな、と感じた。

さらに驚いたのは、自分を相手に委ねれば委ねるほ

ど、触覚を介して相手の情報が入ってくる、ということだ。触覚の逆説というか、ここにはすごく重要なことがあるように思われる。私たちは、例えば「話を聞くときには、相手の目を見ましょう」などとしつけられてきたように、多くの場合、視覚をベースにして人間関係を築いている。しかし、視覚障害者の方々がそうであるように、触覚をベースにした人間関係も同時に存在するのである。視覚障害者に限らず、全身の生活介護を受けて暮らす人々も、触覚を介した人間関係を生きている。そうであれば、見かけのその人の人格と、実際に身体を接触させたときに受けるその人の印象とが、全く異なる場合もある。視覚をベースにした倫理がある一方で、それとは異なる触覚をベースにした倫理もある筈で、そのことを考えてみたい、と思った。

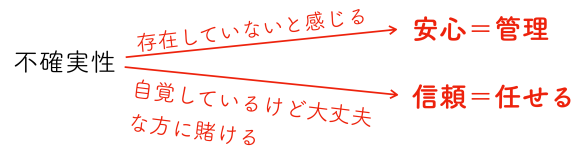
安心／信頼

触覚的な人間関係を考えるうえで、「信頼」が大きなファクターになる。社会心理学などでは、「信頼」は「安心」とはまったく別物だといわれている（山岸，1999）。一見、両者は似ているが、本質的には方向性が真逆の概念である。

例えば、学生が両親に GPS 発信器を持たされている場合を考えてみる。このとき、学生の現在位置が常に把握できるので、ご両親からすれば「安心」といえるかもしれないが、両親／子どもの間に「信頼」は生まれないのではないかな。最近では GPS 発信器が一般化しているので、カップル同志で相手の現在位置を共有している場合もある。また、カップル間でメールアドレスを共有する、といったこともおこなわれているので、もはや、こうした状況は当たり前なのかもしれないが、「安心」は追求しだすと終わりが無い。また、テクノロジーは「安心」の追求に傾きがちなので、それを押し進めると「信頼」が失われてく、ということが起こる。

「安心」と「信頼」とが、どのように異なるのか簡単に整理してみよう。相手は自分とは異なる人間なので、突き詰めれば、1 秒後にどのような行動に出るのか完全には予測できない、という具合に、不確実性を消し去ることはできない。このわからなさ（不確実性）をなるべく無くそうとする、または、存在しないと感じている状態を「安心」という。それゆえ、人は「安心」を得るために相手を管理する方向に向かうことになる。これに対し、「信頼」とは、相手は自分とは異なる人間なので何をするかは分からないけれど、「まあ、大丈夫だろう」と考え、

相手に任せること・委ねることである。このように、他人の不確実性をどのように扱うかということに関して、真逆の方向性をもつ 2 つのベクトルが生まれる。



障害の分野では、「安心」の追求、もっと言えば、「安心」を先回りして追求する、ということがおこなわれがちである。

次の例は、若年性認知症当事者の丹野さんへのインタビューからとったものである。

助けてって言ってないのに助ける人が多いから、イライラするんじゃないかな。家族の会に行っても、家族が当事者のお弁当を持ってきてあげて、ふたを開けてあげて、割り箸を割って、はい食べなさい、というのが当たり前だからね。「それ、おかしくない？ できるのになぜそこまでするの？」って聞いたたら、「やさしいからでしょ」って。「でもこれは本人の自立を奪ってない？」って言ったら、一回怒られたよ。でもぼくは言い続けるよ。だってこれをずっとやられたら、本人はどんどんできなくなっちゃう。

（丹野智文さん：若年性認知症当事者）

丹野さんは、安心を追求する生活をさせられる、と言う。例えば、当事者の集まりがあり、「お弁当を食べましょう」となると、すぐに周りにいる家族の健常者が弁当を持ってきてくれて、蓋を開け、割り箸も割ってから渡してくれる、といったことが起こるのだ。当事者としては、少し時間がかかっても自分でお弁当を取りに行きたいし、蓋も開けたい、お箸も割りたい、そのほうがおいしい、と思っている。もちろん、自分ですれば、お弁当を落としてしまうかもしれないし、お弁当を取りに行ったことを忘れるかもしれない、そのことで幾つかのリスクが生まれるかもしれないが、こうした不確実性が残っていることこそが挑戦を可能にしているし、本人にとっても冒険ができる。こうした挑戦の機会、冒険の機会を周囲の人が奪い、芽を摘んでいるところがある。周りの人による先回りの配慮によって、当事者が成功体験をする機会を奪っている、といえるのではないかな。このようにして当事者には「自分は信頼されていない」という思いが強くなっていく。

同じようなことは、視覚障害者にも起こっている。次の例は、視覚障害当事者の西島さんへのインタビューからとったものである。

目が見えなくなってからというもの、毎日が、ほとバスツアーのようになってしまった、と西島さんは言う。すなわち、自らの行為に先だって、「段差がありますよ」

毎日毎日とはバスツアーに乗っている感じが（笑）、盲の世界の窮屈なところだったんですけど、それに慣れていくんです。目が見えなくなって、とっちらかったんですね。自分の自我が崩壊するとか、分裂したんです。いろんな側面を持っていないと、いろんな人のガイドを受け入れられない。大人になってからの九年ほどは、そのことにすごく苦悩しました。（西島玲那さん：視覚障害当事者）

とか、「そこで右に曲がってください」とか、周囲の人がすべて先回りして声に出してくれるのだという。これらによって「安心な生活を送れる」のであるが、自分が世界と接している感覚が奪われている。当事者としては、時間がかかっても聴覚や触覚を使って世界を理解したいのに、先回りして周囲の健常者が配慮して教えてくれる。そのことで、「自分は信頼されていない」「ずっと障害者を演じさせられている」という思いが強まってしまう、というのだ。

コミュニケーションにおける 伝達モード／生成モード

ここまで述べてきたことをコミュニケーションという観点から整理してみる。私たちのコミュニケーションには、大きく分けて「伝達モード」と「生成モード」という2つの様式がありえる。

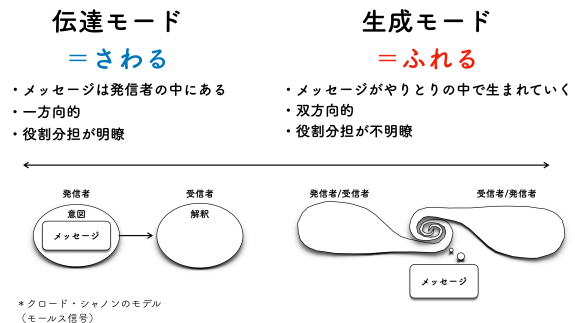
「伝達モード」は、一方的なコミュニケーションで、元々発信者の中にあつたメッセージを一方的に受信者に伝える、という様式である。一般に「コミュニケーション」というと、こちらが想定される場合が多いかもしれない。

しかし、現実のコミュニケーションは、このような様式だけでおこなわれているわけではない。例えば、食事中に交わされる会話などでは、必ずしも予め伝えたいことがあるのではなく、関わりを通して、その場で言いたいことがどんどん生成してくるようなケースがしばしばある。このようなコミュニケーションの様式を、「生成モード」と呼んでみたい。生成モードには、どちらが発信者で、どちらが受信者か、といった明確な役割がない、という特徴があり、話をしているうちに言いたことが生まれてくる。

私たちはしばしば、ある意図で話しているつもりでも、相手が全然違う話題を振ってきて、それに触発されて自分でも想定していなかった何かを言う、といった会話もおこなっている。反面、障害者を交えた場面では、こうした生成モードでの会話が少なくなりがちで、健常者から障害者に向けた一方的な伝達がなされやすい。本当は、障害をもっている人にも感覚があり、見えている

世界があるので、障害者を交えた生成モードの会話をどのように作っていくかが課題になってくるのだと思う。

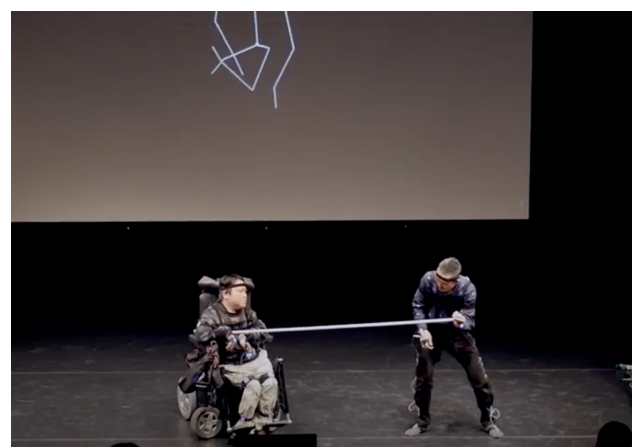
この2つの対比を触覚にあてはめると、一方的な“さわる”が「伝達モード」、双方向的な“ふれる”が「生成モード」といえるだろう。



直接、接触しない “ふれる”コミュニケーション

生成モードで興味深いのは、直接、接触しないほうが、または、直接、接触しないときに、逆に、相手の情報が多く入ってくる場合がある、ということだ。

例えば、ダンサーの砂連尾理さんと、脳性麻痺の小児科医の熊谷晋一郎さんが、2m くらいの棒を使って2人でコミュニケーションをはかる、という実験をされていた。砂連尾さんは、この棒を手で持ったり、腰に当てたり、肩に当てたりしていた。他方、熊谷さんは棒を手を持つのは難しいので、手の甲に固定して、突っ張り棒のような形で相手にツンツンと力を伝え合うようなことをしておられた。



BONUS 第3回 超連結クリエイション Part 1

砂連尾理のアイデアをめぐって

「随意と不随意の境界線を眩く」

<https://youtu.be/atE1812Zkcs> よりキャプチャ

このときのお二人の感想がとても面白い。

このやりとりは、砂連尾さんの材質みたいなものが伝わってくる。

（熊谷晋一郎）

こんなに揺られるとは思っていませんでした。熊谷さんから、こんなに微妙な振動が来るとは思っていなかった。（…）棒を使うまでは、この振動は分かりませんでした。

棒を使って接触することによって、その人の関わろうとする気持ちというか、手の表面の奥側にあるものが、もっと露わになったという感じですね。熊谷さんの押し方が、あの棒を使って僕を揺らしながら、僕がいったいどういうふうに関わってくるのかというのを非常にさぐっていました。それはビジュアルからは分からない手つきでした。

（砂連尾理）

例えば、熊谷さんは「このやりとりは、砂連尾さんの材質みたいなものが伝わってくる」と言っている。「材質」というのは、興味深い表現だ。実際に、棒などで相手を押したときに、10の力で押したら4くらいしか返ってこない人と、14くらいも返ってくる人がいる。この返り具合で、相手の「硬さ」のようなものがわかるので、それが「材質」と言い表されているのだと思う。この「材質」を、触覚を通して感じられる「人格」と言い換えても良いかもしれない。対する砂連尾さんが、「熊谷さんの押し方が、あの棒を使って僕を揺らしながら、僕がいったいどういうふうに関わってくるのかというのを非常にさぐっていました」と述べているように、実に生成的な場が形成されていたこともわかる。熊谷さんは電動車椅子に乗っているの、一見すると「身体が止まっている人」のように思える。しかし、棒を介して触れ合ってみると、揺れ幅こそ大きくはないものの、熊谷さんは、その中で微妙で多様な動きをされていた。熊谷さんは「身体が止まっている人」どころか「活発で、多くの情報を発信する力があり、場合によっては攻撃性すらも発揮する人」として、砂連尾さんには感じられた、というのだ。攻撃性については、熊谷さんのほうで鎌をかけておられたところがあり、砂連尾さんを試すために故意に動きを作り出していたということではあるが、視覚的にはわからなくても、熊谷さんのなかにはそうした側面も存在するということだ。棒を介することで、視覚的に捉えられる質感などが消えるため、逆に、純粋にコミュニケーションを介して、この人がどのような人格をもった人なのか、とてもよくわかる、というのだ。

生成モードからみた障害： 一人ひとりの中にある多様性

こうした生成モードから触覚をとおして障害を考えると、よく言われる「多様性」も違うふうに見えてくる。

触覚を介すと、ぱっと見のその人の印象とは異なる人格が見える。視覚情報として「この人は目が見えない」「この人は車椅子に乗っている」といった差異を感知したならば、当該の人に対して合理的な配慮をしましょう、というのが昨今、世間で言われている「多様性」であるように思う。もちろん配慮は必要だが、それだけを追求しすぎると、逆に分断が進むのではないか。

先ほどもあったが、先回りの配慮をされればされるほど、当人は「障害者」として固定されていき、ずっと「障害者」を演じていかねばなくなる。他方で、触覚を通じて関わっていくと、相手の違う面がどんどん見えてくる。障害者と関わるなかでしばしば気づかされるは、「この人はいつも障害者であるわけではないのだ」という当然の事実である。会社に行けば部下のいる上司であったり、家に帰れば父親であったり、それぞれの人は様々な顔をもっており、そうした多様な顔をもつ人としての相手に関わることが重要なのではないか。一人ひとりの中にある多様性のほうが、社会の中での多様性よりも重要であり、こうした気づきのきっかけを触覚はつくってくれる。

道徳／倫理

ここで、私が本（伊藤、2020）のタイトルにも使っている「倫理」という言葉について少しだけ説明しておきたい。まず、人と人が関わるなかで、お互いが探りながら、見えていなかった相手の面を探し出すことが「倫理」であり、これはとても創造的なことである。これに対し、似た言葉として「道徳」があるが、こちらは「困った人がいれば助けましょう」といった、どのような場所でも通用するような普遍的な一般論である。一般論は全ての場合に通用するとは限らないので、限定された状況のなかで、この人とどのような関わり方・接触の仕方をするのがベストなのかを探り合うことが「倫理」である。

私の本には『手の倫理』というタイトルがついているので、「良い人間関係をつくりましょう」「人と人との良いふれ合いを考えましょう」という主題にみえるが、実は、それだけではない顔を、この本はもっているつもりだ。触覚は、人と人との関わりをととても良い形で作り出すものではあるが、同時に、私たちにコントロールできない面、すごく破壊的な側面も併せもっている。従来から、触覚はとても動物的な感覚だと言われており、人間の五感のなかでは最も低級な感覚とされてきた。視覚や聴覚が精神的で上級な感覚とされ、味覚や触覚は動物

的で低級な感覚とされてきた。私は触覚が好きではあるが、こうしたヒエラルキーを逆転させる必要はあまりない、と感じる。触覚も上級だ、と主張したいのではなく、動物的だからこそのおもしろさが、そこにはある、と言いたい。また、そうした触覚の在り様をしっかりとみておかなければ、「良い人間関係」といったところで、触覚の可能性を引き出し尽くせない。

触覚ゆえの面白さ

様々な例から、ある種の「ヤバさ」ともいえる触覚の面白さがみえてくる。

フレームの混同

介助者になって、二、三ヶ月経った頃のこと。わたしはある女性とセックス「しようとした」。わたしはわたしのやりかたで「いつも通りに」、その女性の服を脱がそうと、ボタン——あるいはジッパーだったかもしれないが、それはともかく——に手をかけた。その時、瞬間的に「介護に似ている」と思ってしまったのだ。介助をしている景色、感触などがフラッシュバックし、興奮めもいところだ。そうしてすっかり「やる気」が失ってしまったのだ。

（前田拓也『介助現場の社会学』）

→介助者としてパンツを履くべきか否か？

前田（2009）より

例えば、この方は介護職に就いていたが、介助をする生活を続けていくと、介助をするという経験とセックスをするという経験とが混ざってしまう、という話をされている。衣服の脱ぎ着をさせるということが、単純に似ているので、介助をしているとセックスのことを思い出してしまう、逆に、セックスをしていると介助のことを思い出してしまう、というのだ。頭で考えると、2つの経験は全く別の状況であり、両者を混同してしまうのは最悪なのだけれど、どうしても触覚的な感触から2つが連続してしまう、ということがある。

そのとき私の手は、私の思考とは違うものを認識していました。私の手は覚えていたのです。幼児のずっしりと希望のつまったような体の重み、つやつやした肌の弾力の強さ、ブクリと膨れたお腹、お饅頭のような握りこぶし、一列に並んだ大豆のような足の指……。

私は、だんだん今がいつで、自分が何歳なのか、よくわからなくなってきました。私の膝の上でなすがままに洗われているのは、私の子どもの子どもです。それはよくわかっています。なのに私の手がリアルに思い出しているのは、私の子どもを洗っていたときの感触です。その「私」は、二十代です。そして私の気持ちもそのときに引き戻されてくのです、うっとりと。

——このまま時間が止まってしまえばいい（樋口直美『誤作動する脳』）

樋口（2020）より

また、この方はレビー小体型認知症の患者さんだが、お孫さんが小さい頃に家に遊びに来て、その子を入浴させようとした時に、赤ん坊をお風呂に入れてやるなんてもう随分前のことだし、「どうしよう」と一瞬、思ったのだが、子どもの体をさわった瞬間にハッと記憶が蘇り、…というか、タイムスリップしたかのように、自分

が実の子どもを入浴させていた頃に時間が戻った、というのだ。実際には、孫を入浴させているのだけれど、感覚としては自分の子どもを入浴させている状態になり、どのようにすれば良いかがスッとわかった、と話されている。これはとても幸福な経験だと思う。自分の子どもを入浴させる時間というのはとても幸福な時間であり、誰もが、できることなら戻りたい経験である。この方の場合、たまたま認知症で、「現在の感覚」が非常に揺らぎやすい時間を生きておられることで、時間の枠組み、すなわち「ここが現在である」という感覚が、触覚を介して容易に変わってしまう。そして、タイムスリップのようなことが起こっている。これは、先ほどの介護士の方の例とは少し異なるが、現実が別の現実に移行してしまう、その扉として触覚が働いている、と言えるかもしれない。

老衰死とは病死でも事故死でもない。その死に立ち会う家族に求められる態度というものがあるように思う。その態度を養うには、閉じてゆく父親、母親、おじいちゃん、おばあちゃんの身体に触り続けることが必要であるように感じている。身体の有界性を触ることで知るのである。

「穏やかに近く」ための基本的な条件として、身体の変容に沿う態度が大切になる。一般的には「添う」という字を使うが、よりあいではあえて「沿う」を使っている。「添う」は人を相手にした態度に使うが、「沿う」は川や山など自然を相手にした態度に使われることが多い。老いた者は自然の摂理に沿いながら死を迎えるので、それに付き合う介護職も沿う態度が求められているように感じる。

（村瀬孝生『看取りケアの作法』）

村瀬（2011）より

また別の場面、死、人が亡くなる場面での触覚についても考えてみたい。村瀬さんは高齢者のための介護施設を運営されているが、仕事のなかで入居者を看取る経験を数多くされている。そのなかで、亡くなっていく方の身体に接触することがとても重要だ、とおっしゃっている。なぜ重要なのか。私たちは、たとえ亡くなりそうになっていたとしても、頭のなかでは、自分のお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんに長生きしてほしい、と思う。しかし、実際に死にゆく人の身体に接触することで、人間的な思いを超えて、「この体は亡くなりつつある時間を生きている」という身体側の理屈をきちんと納得できるのだという。ここでは頭での理解を接触が越えていく、ということが起きており、動物的であるからこそ、低級であるからこそ到達できる遠い世界がここにはある、と言えるように思う。

また、ここでのポイントは、村瀬さんが一貫して“さわる”という言葉を使い、決して“ふれる”とは言わないことだ。私たちは、人間的な接触は“ふれる”だと思いがちだが、私たちの身体は「人間」であると同時に「自然」でもあり、身体は容易に「人間」を超えていく。「生／死」の場面とはまさに「人間」を超えた出来事であり、それを理解するための接触は、もはや一方的であることが当然で、“さわる”でしかあり得ない。逆に、ここでの接触が“ふれる”だとすれば、「死」が思い通りにコミュニケーションがとれる対象になってしまい、「あまりにも人間化されすぎた出来事」として誤って理解されてしまうのではないか。

佐田さんが亡くなった後も私、スーさんの〈手の感触〉と
かざうーっと残ってたんですよ。せやからずうーとず
うーっと残ってて、でもその〈手の感触〉が思い出される
うちは、まだ私の中ではスーさんはあのう、亡くなった人
ではあるんだけど、自分の中で、たぶん日常生活でなん
らかの影響を与えてきそうな。

（西村ユミ『語りかける身体』104-5）

西村（2001）より

あと少し、死と触覚について話を続けたい。この例は、植物状態の患者さんを看護する看護師さんへの聞き取り調査をしている西村ユミさんの研究（西村，2001）から引いたものである。患者さんが亡くなってからずいぶん経った後に、看護師さんが患者さんの感触を自分の手に思い出す、手の記憶が強く残っている、というのだ。このことを「なぜだろう」と看護師さんが考えたときに思ったのが、自分は生前、植物状態の患者さんのことを「一方的にさわっていた」と思っていたが、このように感触が残っているとうことは、実は患者さんからも「さわられていた」のではないか、ということだった。具体的には、座位の姿勢をとるときに、看護師さんは患者さんの体を支えるのだが、体重のかかり具合を振り返ると、患者さんも座ろうと頑張っていた、ということに手の記憶を介して思い当たったのだ。このように、人が亡くなってからも人間関係は変わり得る、すなわち“さわる”関係だと思っていたのが“ふれる”関係であったと気づくことがあり得るのだ。

触覚の記憶は長く残る。私も視覚障害の人とお会いした後、数日、その方の身体に接触した記憶が手にポーッと温かく残り続ける。こうした触覚の記憶を介して、人間関係が変わる、ということも起こり得るのだろう。そこには、経験が、私たちが頭で考えることを超えていく可能性があると思う。

手の記憶

『手の倫理』という本を出してから、様々な方が、インタビューのなかで、自分の手の記憶について語ってくださった。実は、そのうちのほとんどの方が、“ふれる”経験ではなく“さわる”経験の記憶を語ってくださるのである。“ふれる”経験は、その場で上手くいって完結している、と考えられるかもしれない。逆に“さわる”経験は、その人のなかに記憶として残り、語り得ないものを含み、「これはなんだったんだろう」という思いが続いていく側面がある。

大英博物館で修復のインターンをしていたときに、自分が足の部分を担当していた仏像の手に自分の手を合わせたいという欲求がすごくあって、右の手のひらを前に向けている姿で、調べたらそれは「don't fear」という意味でした。それである朝早く仕事場に行って、誰もいないときに横に座って手を合わせてみました。もうゾクゾクとする感じがしました。手を合わせたことで、この仏像が言っている「don't fear」ということが入ってきて、将来私が落ち込んだりしたときに、この感触を思い出すんだろうなと思いました。心が通じたというか、特別な感覚でした。仏像も床に寝ていると、威圧的じゃなくて、親近感があるんですね。普段見下ろされているのに、私が見下ろすというのは変な感覚ですね。（S.M.さん）

この方は、仏像の修復の仕事をしている方だが、足の部分を担当していた仏像の手に「さわりたい」とずっと思っていた。ついに、ある朝、早起きして早めに出勤して、仏像の手に自分の手を合わせてみた、という話をしてくださった。この仏像の手のポーズは「Don't fear（怖がるな）」を表す典型的なものだったというのが、手に接触した瞬間に「Don't fear（怖がるな）」が自分のなかに入ってきて、とても納得した、という。そして、自分が将来、もし困ったり、落ち込んだりしたときには、たぶん、この手の感触を思い出さだろう、とおっしゃった。ここには、言葉や視覚を超えた納得が、この人にやって来た、という気がする。

以前、仕事で九谷焼の赤絵の先生にインタビューしたことがあります。（…）
傷でもつけたら！とビクビクしながらも壺を持ち上げ撫でつつ頭の中では「これ幾らすのかな」なんていう冷静な自分がいました。
でも、手から何か伝わってくるのです。
それは今もうまく言語化できないのですが
その作品を作っている時の先生の集中力というか、エネルギーとかそういうものが
手からビリビリ伝わってきてしまい頭は冷静なままなのに、勝手に涙があふれてきてしまいました。（K.Fさん）

頭は冷静なのに、勝手に涙があふれてきてしまう、という経験を語ってくださった方もいる。これは、壺を持ったときの感触にまつわるものだ。ここでは、物体にさわっているだけなのに、そして、頭は冷静なのに、感情が先走ってしまう、ということが、触覚を介して生じている。

私自身の記憶についても、『手の倫理』の「あとがき」のなかで述べている。本を書くなかで、私自身のなかに

幼い頃の幸福な思い出のひとつに、「盗みさわられ」があります。
「盗みさわられ」とはもちろん私の造語です。盗む相手は母。「盗み見」をするように、こっそり、母にさわられるのです。（…）
「汚れを落とす」とか「薬を塗る」とかいった目的から解放された、純粋にさわることを楽しんでいる手。私にとって大きな喜びだったのは、母が母自身の快楽のために自分をなでているように感じられたことでした。お母さんにとって、自分はさわりたくなる存在なんだ！ その動きが無意識的であればあるほど、母の手は自分という存在をまるごと肯定してくれているような感じがしました。
私はそのときたぶん小学校低学年くらいで、本心ではまだまだ甘えたい年頃だったのかもしれませんが、ああ、ずっとずっとなでていてほしいな。夢か現かのぼんやりとした頭で、私は必死に祈っていました。
そのために私ができることはただ一つ、「寝たフリ」をすることです。母の手の動きは無意識的なもので、私が目を覚ましたら、きっといつもの距離のある関係に戻ってしまうことでしょう。母に気づかれないように息を殺し、目をつむってじっとさわられるがままになっていました。この子は寝ているこの子は寝ているこの子は寝ている……。そんなふうにして幼い私は、私の知らない母の一面に「盗みさわられ」ていたのです。（『手の倫理』あとがき）

様々な触覚の記憶が蘇ってきたが、その一つが、この記憶だった。小さな頃、電車のなかで母親が寝ている私の体をさわる、この感触が非常に幸福だった。起きている間は、母親と私の関係は、人間的な関係、もっと言えば母／娘なので、どこか教育的な関係、あまり甘やかしてはいけないという接触の仕方になっていた。しかし、私が寝た瞬間に母親のさわり方が変わる。それは、猫可愛がりで一方的な“さわる”となるのだ。私との心の交流のないところで、むしろ母親の本当の愛情が発揮されていたように感じる。だから子どもの頃、私は、目が覚めてしまうと関係が“ふれる”に変わってしまうので、寝たフリをして、このまま“さわられる”経験が続いてくれ、と思っていた。

この例でも、自分にとっては“さわる”のほうが深い経験として残っていることがわかる。“さわる”は、“ふれる”で取り結ばれる「当たり前の人間関係」「予定調和」「他者理解」を破壊する力をもっている、と言えるかもしれない。それゆえに“さわる”ことも結構、重要なのではないか、と思う。

手は雄弁

今回のフォーラム／研究交流会では、この講演の最後の時間、みなさんにご自身の「手の記憶」を語り合っていただこうと思っている。また、その記憶を今日、お話しした“ふれる”／“さわる”の対比で分析してみたい。その際、せっかくタッチに携わる方々にお集まりいただいたので、実験的に、画面に自分の手が映るようにして話をしてみたい。

コロナ禍で多用されるようになった Zoom をはじめとしたビデオ通話のコミュニケーションでは、顔だけが映し出されるのが普通である。しかし、顔は意識されている部分であり、本人が作りたい表情をしているところが

あるので、実は、あまり情報量がない。他方、手は無意識的に動いてしまう場合も多く、ある面で、その人の本音が出てしまう場合がある。たとえば、人間関係的に「このシチュエーションは厳しいな」といった場合に、無意識におでこをさわる仕草をしてしまう、といったことがある。あるいは、緊張すると両手を揉み合ってしまう、ということもあるかもしれない。

手は顔とは違うメッセージを発している、と言えるかもしれない。少しだけ、肖像画で例をみておきたい。



Leonardo da Vinci
Dama con l'ermellino
1490

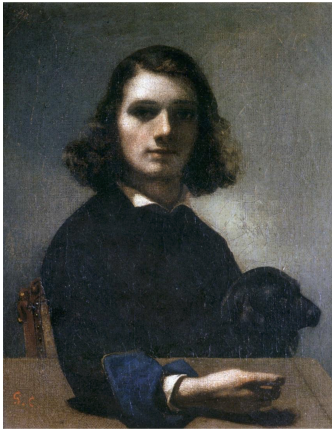
一番、有名なのがレオナルド・ダ・ヴィンチによる、テンを抱いている少女の絵である。この少女は、とてもクールな顔つきをしているが、手は異様に緊張している。私はテンを抱いたことはないが、見るからに筋肉が発達していて、獰猛な生き物であることを予想させる。そのことを表してか、この絵は、顔と手が分裂しているような印象を与える。



Parmigianino
Self-portrait in a Convex Mirror
1523

パルミジャーノのこの絵も有名で、凸面鏡に映る自分の顔を描いている。鏡にとって手前にある手がとても異様に大きく映っていて、顔よりも手のほうが存在感があり、また、手が顔とはまるで別の生き物であるかのよ

うな感じが表現されている。



Gustave Courbet
Self-portrait,
1842

パルミジャーノの影響を受けているのが、恐らくクールベであり、クールベの自画像は、とても面白い。この絵では、「この人は手が麻痺しているのかな」と思うくらい、逆に、手が小さく描かれている。顔が端正に描かれているだけに、手が人間の手とは思えない、机の上にゴロンと置かれた物体のようにすらみえる。



Gustave Courbet
Self-Portrait (Man with Leather Belt)
1845-6
C) Michael Fried

クールベの自画像は他にもあり、この絵の顔は眠そうなのに、手だけ、ちょっと怖いくらい力が入っているようにみえる。特に、自分の腰のベルトをつかむ左手は、「こんなとき、ここまで人は力を入れるだろうか」と思ってしまうほどの緊張感を有している。また、右手も、顔とは引き離された別の生き物のように感じられる。



Zoom 画面っぽいのが、当時の同業者たちを集めた集団肖像画のこの作品である。普段、Zoom では顔だけしか映らないが、手が画面に入ることによって、みんな、おしゃべりになる。作品のなかで、それぞれの人の顔は皆、堂々としていて、あまり区別がつかない。しかし、それぞれの人の手は違って、手が語っているようにみえる。

美術の世界でも、人間の顔と手との分裂は面白く、それを Zoom でのコミュニケーションの中に取り入れたら面白いのではないかと、思う。

文 献

伊藤 亜紗（2020）．手の倫理 講談社

西村 ユミ（2001）．語りかける身体——看護ケアの現象学—— ゆみる出版

樋口 直美（2020）．誤作動する脳 医学書院

前田 拓也（2009）．介助現場の社会学——身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ—— 生活書院

村瀬 孝生（2011）．看取りケアの作法——宅老所よりあいの仕事—— 雲母書房

山岸 俊男（1999）．安心社会から信頼社会へ——日本型システムの行方—— 中央公論新社

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>

